

霊峰富士の宗教文化史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 湯之上, 隆 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/8007

第5回 霊峰富士の宗教文化史

湯之上 隆

1 はじめにーパスポートと富士山

日本国旅券(パスポート)の1ページ目には、富士山と桜の花が透かしで入っています。

パスポートは、一九世紀以後の国民国家の成立とともに、国家間での人の移動や交流が円滑に進むよう考えられたもので、国境を越えるさいに、主権国家の国籍証明としての役割をはたしています。

日本のパスポートの表紙裏には、日本国外務大臣の名義で、日本国民である本旅券の所持人を通路故障なく旅行させ、かつ、同人に必要な保護扶助を与えられるよう、関係の諸官に要請する。

と書いてあります。

普通の手帳より薄いパスポートを、日常使うことはほとんど

ありません。しかし、これを持たないと日本国民として外国に行けません。また海外に渡ったとき、盗難などにより紛失すると、再発行してもらわなければ帰国すらできません。日本国籍の象徴を目で見える形にしているパスポートに、富士山と桜の絵が入っていることに注目して、話を続けます。

富士は不二・不尽・不死・福慈なども書かれ、美女をも指す芙蓉という雅称もあります。ちなみに、一九二二年創立の旧制静岡高等学校(静岡大学の前身校の一つ)の学生寮である仰秀寮ぎょうしゅうの名は、構内から望めた秀峰富士を仰ぐ意味ですが、その代表寮歌「地のさざめごと」の一節に、「芙蓉の峰はむくも厳かに 天の黙示あめをもらすなり」という歌詞があります。

2 歌に詠まれた富士山―山辺赤人から『古今集』へ

一〇万年ぐらい前から噴火と溶岩の流出を繰り返して、およそ一万年前から長い時間をかけて円錐形の、しかも独立する清澄高雅な山容になったとされる富士山は、その姿を目にする人びとにとって火を噴く荒ぶる畏怖すべき山でした。それとともに、広大な裾野の上に屹立する姿の比べようもない美しさは賞賛の対象ともなりました。

万葉歌人の山部赤人は、「富士の山を望る歌」の冒頭に、「天地の分かれし時ゆ 神さびて高く貴き」と歌っています。いくつかの英語訳の一例として、アメリカ生まれの日本文学作家、リービ英雄さんの訳をあげてみましょう。

Since the time when heaven and earth split
apart...high and noble, like a very god

そして山部赤人は、この詞書に続けて、天地開闢の古くから、靈妙で高く貴い富士山をたたえ、

田子の浦ゆうち出てみれば真白にぞ 富士の高嶺に雪は
降りける

と詠んだのです。これはのちに歌枕としての富士山を詠んだ、おびただしい数にのぼる和歌のなかで、今でももつとも優れた歌としてよく知られています。

基本的な歌ことばとしての意味をもつ歌枕は、しだいに有名な歌人らによまれた名所をも指すようになります。遠江でいうと浜名湖や小夜の中山、駿河では宇津ノ谷峠や浮島原を歌枕としてあげることができます。国文学者の研究によると、歌枕として知られているものはおよそ二〇〇〇に達するといえます。そのなかでもつとも有名なものが富士山です。

前にあげた山部赤人の「田子の浦ゆうち出てみれば」には続けて、「真白にぞ」という言葉が出てきます。リービさんの『万葉集』英訳にあたっての苦勞話によると（『英語でよむ万葉集』岩波新書、二〇〇四年）、「真白に」ではなく「真白にぞ」の「ぞ」を英語で何と表現するか、苦勞したそうです。それをリービさんは、'white, pure white' と表現しました。つまり、whiteのあとにpure whiteやwhiteを二回用いて、「ぞ」という力強いことばにひそむ感性を英語に訳したわけですね。

『万葉集』などの古典を英語訳で読んでみると、興味深いものがあります。また、仏教の教義のよりどころとなる経典は、漢字が並んでいてわかりにくく、法要などのさい、音読する読経では意味を理解できません。けれども英語で経典を読むと、たいそうわかりやすいことに気づきます。漢詩でも同じで、むずかしい漢詩を英語で読むと、理解のための導きになります。近年は英語で和歌や漢詩や経典を読む本が刊行され

ていますので、みなさんも試みられてはいかがでしょう。

さて、富士山の噴火は九一〇世紀には特に活発で、とりわけ八〇二年(延暦二一)には霰あられのごとく降った大量の火山灰によって、東海と東国とを結ぶ幹線道路の足柄路が塞がれたため、復旧までの一年ほどの間、急いで開かれた箱根路を使っています。この延暦噴火から六〇年ほどのちの八六四年(貞観六)の貞観噴火はさらに大規模で、北麓にあった「せのうみ」に大量の溶岩が流出して、精進湖と西湖に分け、青木ヶ原と呼ばれている樹海の原型をつくりました。今でも御殿場市・裾野市・小山町辺りの発掘調査では、火山灰が数メートルも積もっている場所があります。これも富士山大爆発の影響です。ちなみに、二〇一一年三月一日の東日本大震災で注目された二一〇〇年余り前の貞観地震(八六九年)は、貞観噴火の五年前に起っています。

そして富士山は、しばしば火と煙を吹き上げるさまから、燃えたぎる恋の情熱を訴える題材として歌に詠まれることも多かったのです。富士山は宝永(一七〇七年)以来、三〇〇年以上も噴火していませんが、九一〇世紀ぐらゐまでは爆発を繰り返し、しばしば白い煙をたなびかせていました。歌人たちはこの富士山の燃ゆる火ひに自分の恋こひの情熱をなぞらえたのです。

日本で初めて天皇の命令により作成された『古今和歌集』の序には、「ふじのけぶりによそへて人をこひ」と記されていて、さらに巻一四には藤原忠行の、

君といへば見まれ見ずまれ富士のねの めづらしげなく燃ゆる我恋

という歌が収められています。しかも、富士山を詠んだ歌は恋の部に収められていることに注目しておきましょう。

富士山に初めて登ったのは、山を修行実践の場とする修験道の開祖とされる役小角(役行者)とされていますが、今のところ確証はありません。九世紀の漢学者として名高い都良香は、富士山について初めて詳細な記録を残し、富士山の偉容を「直に聳えて天に属く」、すなわち、真つすぐにそびえてあたかも天に届くばかりである、と表現しました。そして噴火活動について記した後には、「蓋し神の造れるならむ」、つまり、神の造化によるものであろう、と叙述しています。

3 歌に詠まれた富士山―西行以後

後鳥羽上皇から「生得の歌人」との評価をうけたと伝えられる西行の俗名は、鳥羽上皇の身辺を警衛する北面の武士、佐藤義清でした。『新古今和歌集』の代表的歌人の一人として知

られるようになり、後世の文学や芸能・思想に大きな影響を与えました。彼は特に桜の花を好みました。この桜は花と葉がほぼ同じ時期に開くヤマザクラです。いま花見といえれば思い起こすソメイヨシノは、江戸時代の終わり頃、江戸染井村の植木職人がエドヒガンとオオシマザクラを交配させ、花が先に咲き、散り終わるころ葉が出てくるように品種改良したものとされています。ソメイヨシノは明治以後、公園や小学校の校庭などに多く植えられるようになったことから、日本中に広まりました。

西行は、桜の花をたくさん詠んでいます。たとえば、

仏には桜の花をたてまつれ わが後の世を人とぶらはば
と、菩提を弔うさいには、桜を献花してほしいと望み、さらに晩年には、桜の花の満開の、満月の頃、人生を終えたいと願いました。

願はくは花のしたにて春死なん そのきさらぎの望月の頃
そして一一九〇年(文治六)二月一六日(新暦で三月二三日)、桜花満開と思われるころ、念願どおりの最期を迎えました。遁世者としての生き方と、同時代の歌人たちにも愛誦された名声と、願望をはたした終焉とが大きく影響して、西行は後世あこがれの歌人になっています。芭蕉は、『笈の小文』

の冒頭に、

西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、其貫道する物は一なり、と、西行の和歌を風雅論の中に位置づけ、高く評価しています。

西行は数え年二三歳で出家したあと、二〇歳代後半に一度、東北地方を旅しています。そして六〇歳を越えてもう一度、東北に向きました。それは、一一八〇年(治承四)八月、源頼朝が反平家の旗をあげたのちの一二月に、平重衡が奈良の都を焼打ちして、東大寺の大仏もほとんど焼け落ちたため、翌年始められた再建工事と関わります。そのとき、大仏に金箔を塗ることが計画されます。当時の日本列島で金を一番産出した東北地方の支配拠点である平泉への使者となったのが西行です。西行は平泉の支配者である藤原秀衡とも血縁であり、しかも、東大寺再建を中心に進める重源とは高野山での修行仲間でもあったことから、白羽の矢が立ったのです。六九歳にして、知友たちの懇請を受け、滅びた平家への追悼もこめて、死を覚悟した東北への再びの旅立ちをします。

西行は東海道を下り、富士山を仰ぎみて歌を詠みました。

風になびくふじのけぶりのそらにきえて ゆくゑもしらぬ

わが思哉

現在よりも早く生涯を終える人の多かった時代に、旅も精神も漂泊を続けて七〇歳も間近に到達した人生観照の心情を、

富士山から立ちのぼる煙が風になびく光景になぞらえて詠んだ歌です。先にあげた山部赤人の和歌とともに、富士山を詠んだ秀歌の代表として知られており、西行ものちにふり返って、この歌は自分の作のなかでもいいものと評価しています。

そして、西行が富士山を眺める場面は後世の画家たちにとって恰好の題材になり、江戸時代には「富士見西行図」として描かれるとともに、「絵入西行物語」など大衆向けの木版本も刊行されました。

江戸時代初めの幕府御用絵師の狩野探幽は、山頂を三つに分けた三峰型と呼ばれている富士山を、はるか手前から眺める西行を描いたのに対し、江戸時代中ごろ以後の長澤芦雪は、正統派の狩野探幽のものと構図を大きく変え、半分だけの富士山のすぐふもとから西行が仰ぎ見ている大胆な図柄にし、富士山の高さを表現しています。

明治中頃、旧世代の伝統的歌風を批判して俳句や和歌の革新運動をおこなった正岡子規は、好んで富士山を歌にしました。「富士見西行図」を題材に詠んだ「西行の顔も見えけりふじの山」もその一つです。この句に続いて、東京の寄宿舎生らとの絵の合作で描いたのは、腰をおろした西行が富士山を眺める図です(図1)。子規と親しい間柄の夏目漱石は、一八九〇年(明治二三)七月の子規あての手紙で、「西行も笠ぬいで見

る富士の山」の句を送り、子規自慢の「西行の顔も」の句も、「不図口を衝て出た名吟」には及ぶまい、と書いており、才気があふれる二人の軽妙な遊びの世界をみせて、心惹かれるものがあります。

さて、西行以後も京都の文人や歌人たちは、生涯のうち一度でいいから富士山を見たいという、富士山に対する強いあこがれを抱いていました。そして、旅をしてその姿に接すると、都で見たことのある絵よりも、この上なく美しいと感じたのです。連歌師の正広は、一四七三年(文明五)、富士山遊

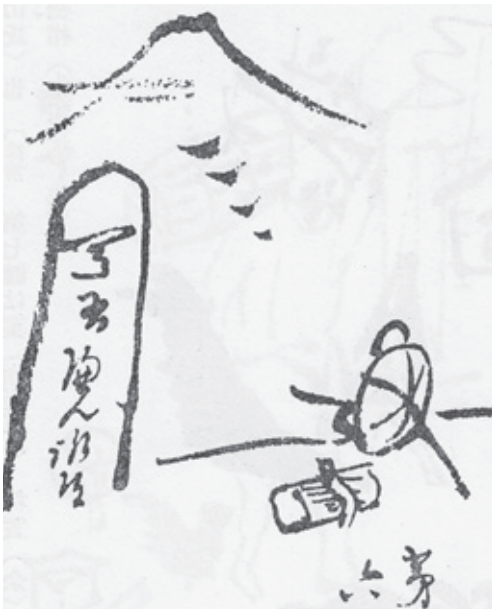


図1 正岡子規筆「富士見西行図」(『子規全集』第十巻、講談社より採録)

覧の旅に出て、興津の浦から三保松原のほとりまで舟をこぎださせて海上から富士山を望み、「老いの後の思出これに過はべらじ」と書きとめています。彼はこの時、数え年六二歳、自分の老いゆく身を考えて、これほどの楽しい思い出はもうなかるう、と鮮やかな富士山を眺められた幸運と詠嘆を記したのです。

きょうは富士山の信仰と芸術について話していますが、現代の便利さに浸りきった感覚ではなくて、交通体系の整っていない時代であったからこそ、あこがれつづけた富士山を初めて見たときの先人たちの深い感慨に思いをよせていただきたいのです。私の住まいからは近くの建物ごしに富士山を望めます。朝起きて、富士山が見える天候であれば、窓をあけて確かめることが日課になっていて、毎日変化する美しい姿を目にすると、ささやかな幸せを味わい、清々しい気分になります。

東海道新幹線の富士川鉄橋あたりの視野が開けたところになると、広大な裾野からそびえ立つ山容を間近に望めるため、新幹線から見える窓側には、カメラやスマートフォンを構える人たちをよく見かけます。また富士山を見慣れた人は、日本平や三保松原・西伊豆海岸などマイ富士山とも言うべきお気に入りの場所をもっているものですが、富士川鉄橋周辺はとりわけ人気のスポットでしょう。

連教師の最高峰と評価される宗祇は多くの戦国大名たちに招かれ、一か国から富士山を見たといい、そのなかで関東の筑波山（現在の茨城県つくば市）から見る富士山がとりわけ美しく、伊豆の三島辺りから見る富士山は手前に小さな山が連なつて優美ではない、と当時最高の文化人であった三条西実隆に語つたといえます。なお、富士山が記録に初めて登場するのは、八世紀初めの『常陸国風土記』です。それには、多くの人々が歌舞や飲酒を楽しむ筑波山の神に関わる話として、神祖尊の巡行のさい、富士の神は秋に新穀を供える新嘗で忙しいとの理由で宿りを認めなかつたことにより、富士山は雪をいただく山になつたとの伝承を取めています。

京都から東海道を旅する歌人たちは、ようやく三河国の高師山（現在の愛知県豊橋市内）あたりで富士山が見えると、富士山を待ち望んだ感慨を表現しています。三河国から国境の境川を越えて遠江国に入り、富士山を眺望できたのは潮見坂（湖西市白須賀）でした。一四三二年（永享四）、富士遊覧をかねて、鎌倉公方足利持氏を威圧する旅に出た室町將軍足利義教は、潮見坂から富士山を眺めて、

今ぞはやねがひミちぬる塩見坂　こころひかれしふじをながめて

と詠み、心惹かれ続けた富士山をようやく念願かなって我が

目で確かめた喜びを表現しています。

4 絵画に描かれた富士山

富士山の美しさは和歌や漢詩に詠まれたばかりでなく、絵画にも描かれました。

富士山が描かれた現存最古の作品は、一〇六九年(延久元)の『聖徳太子絵伝』です。これは、聖徳太子の神秘的な魔力を表す絵として作られたもので、その一場面で甲斐国(現在の山梨県)から献上された黒駒に乗る二七歳の聖徳太子が富士山頂に登ろうとしています。この富士山は地中から突然わき上がるように描かれています。この絵の作者は富士山を見たことがなく、想像で描いたのでしょう。三つの峰は白く描かれており、雪が消えることのない富士山と認識されていたことを示しています。富士山頂の峰々のうち、駒ヶ岳は聖徳太子が黒駒に乗って登ったことに由来するといわれています。

また、富士山は貴族たちの間に流行した名所絵にも登場します。名所絵は、障子やふすまに全国の名所を描かせて屏風風にして飾ったものです。現在は残っていませんが、特に有名なものとして、後鳥羽上皇により一二〇七年(建永二)、京都三条白川に建てられた最勝四天王院の障子には富士山が描か

れており、以後、富士山は貴族たちにとって羨望の図柄になっていきます。

富士山を描いた絵としてとりわけ有名なものは、一二九九年(正安元)の絵巻物『一遍聖絵』です。この絵巻物の主人公一遍は、従来「鎌倉新仏教」と言われてきた鎌倉時代の仏教改革運動のなかで、最後の改革派として、時衆(江戸時代以後、時宗と称する)を起こします。『一遍聖絵』の富士山は、東海道の街並みの上部に、先ほどの『聖徳太子絵伝』よりは少し緩やかな傾斜で描かれています。そして、ここでも富士山頂は白くなっていますので、富士山はいつも雪を頂いていると考えられていたでしょう。

富士山を絵画の対象として、とりわけ有名にしたのは雪舟でした。雪舟は一四六九年(文明元)、中国の当時の明から帰国した後、『富士三保清見寺図』を描きました。現在、残されているのは模本ですが、その図様はのちに狩野探幽をはじめとする幕府御用絵師の狩野派など多くの画人たちに影響を与え、継承されました。一六六七年(寛文七)に探幽の描いた『富士山図』は、のちの狩野派のモデルになります。

一五三〇年(享祿三)頃に描かれた『富士参詣曼荼羅図』は、狩野派の祖・正信の子である元信が制作の指導的な立場にあってと指摘されています。手前右に三保松原、左に清見寺、そ

の上に神社の社殿、そして一番上に富士山、富士山の両側に月と太陽、上空には散華さんげが舞う構成になっていて、富士山独自の宗教世界を表現しています。

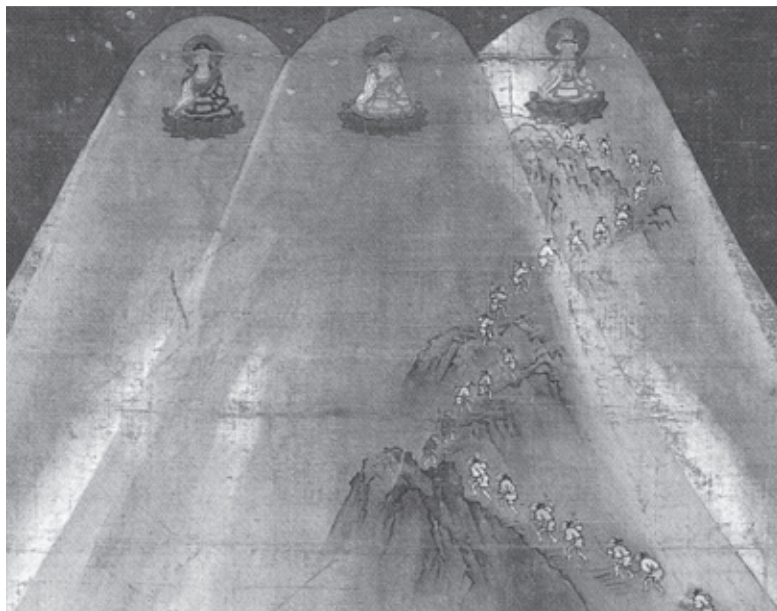


図2 富士参詣曼荼羅図(口絵7の頂上部)／富士山本宮浅間大社所蔵

行者たちは草鞋わらじをはき、松明たいまつを持ちながら、三峰型に描かれた山頂を目指して登っています(図2)。そして、三つの峰にはそれぞれ仏像が描かれていますので、登ることによって仏の世界に近づき、功德くどくを増すと考えられたのです。

俳人であり、画家としても池大雅と併称された与謝蕪村が沼津の千本松原あたりから描いた富士山、西洋画の司馬江漢が現在の静岡市葵区長沼から描いた富士山、西伊豆の岬越しに描いた富士山など、江戸時代中期以後には多くの画家が従来の三峰型にとられない、自分の目で見たまの富士山を題材にしました。とりわけ著名なものは、葛飾北斎が一八三一年(天保二)頃に大胆な構図で描いた『富嶽三十六景』でしょう。とくにそのうちの一点『凱風快晴』は、画面の右に寄せて富士山の左側を広く見せる構図をとり、南風をうけてたなびく多くの雲も相まって、富士山を高く見せる効果を示しています。『富嶽三十六景』は国内で大評判になり、近代の絵画や写真にも影響を及ぼしたのみならず、ヨーロッパの画家たちにも受け入れられました。とくにゴッホは浮世絵を収集するほど影響を受け、背景に浮世絵を描いているものもあるほどです。

私は授業などで、富士山の絵を思い浮かべて描いてください、と聞いてみるがあります。学生の多くは山容を急勾



図3 江川英龍(坦庵)筆『富士山真景図巻』／公益財団法人江川文庫所蔵

配で描きます。それほどに富士山は高い山という思いこみがあるようです。富士山の標高は三七七六メートルであり、世界でいうと一〇〇〇番目ぐらいです。なぜ三七七六メートルのそれほ

ど高くない山がこれほどに重要な意味を持つのか、このことは富士山の信仰と芸術に関わります。これがほかの国の山になりことなのです。

たとえば、各地に「〇〇富士」という、ふるさと富士、郷土富士と呼ばれるものがあります。北は北海道の利尻富士から、南は沖縄の本部富

士まで、それぞれ正式の名前とは別に、富士山の形に似ていることから「〇〇富士」といわれるのです。それは三五〇ぐらいあるといわれています。私の学部で受け入れている留学生に、皆さんの母国で、聖なる山と呼ばれている山がたくさんあるでしょう、その山を日本の「〇〇富士」のような、特定の別名で呼ぶものがありますか、と尋ねると、アジア・ヨーロッパ・アメリカ問わず、そういう話は聞いたことがない、と言います。おそらくこれは日本だけの現象だと思えますし、このことは日本人にとつて富士山がきわめてなじみ深いことを示しているのだと思います。ただし、「〇〇富士」はそれほど古いことではなく、新しい時代、ひょっとしたら明治以降のことなのかもしれません。

江戸時代の富士山絵画の最後に、伊豆韮山の江川文庫資料から新しく見つかった、代官江川太郎左衛門英龍(号は坦庵)が描いた富士山を紹介します(図3)。これは『富士山真景図巻』と名づけられた数点の富士山を墨で描いたもので、いずれも坦庵による実景画と思われます。そのうちの一枚の左端には「大野村徒 華寺望富士図」と書いてあり、一字を欠くある寺から富士山を望んで描いたことを示しています。大野村の「華寺」とは、現在の静岡市清水区村松の日蓮宗龍華寺を指すと考えられます。日蓮宗に帰依していた坦庵は自分の名前の

「龍」をはばかり、意識して一字を空けたのでしよう。

龍華寺には、徳川家康の側室養珠院(お万の方)の位牌が安置されています。養珠院の出自はよくわかっていませんが、日蓮宗に深く帰依し、坦庵から八代前の英長(小田原北条氏からかわつて家康に仕え、代官となる)の養女として、家康の側室に迎えられたといわれ、江川家と深い関わりをもっており、現在も江川家には養珠院から賜った羽子板が残されています。

また龍華寺は観富山という山号が示すように、富士山や三保長州など十二景眺望の地として著名でしたから、坦庵は江川家ゆかりの養珠院をまつる龍華寺に参詣し、『富士山真景図巻』を描いたと考えられます。

5 信仰の山、富士山

秀麗な姿が歌に詠まれ、また屏風や絵巻などに描かれた富士山は、何よりも霊峰であり、信仰の山でした。

そびえ立つ富士山はもともと遠くから仰ぎ拝むもので、登る対象ではありませんでした。ところが山岳修行者の中に、あの高峰をきわめて修行を高めたいと願い、実践する人々が現れました。確認できるところでは、実際に登って頂上は大日寺を建立した末代上人は、一四九九年(久安五)五月、鳥羽

法皇から富士山に埋納するための如法經(法式にしたがって書写された經典で、法華經が一番多い)を賜ったと伝えられます。ただ、この実物は確認されていません。

富士山に奉納されたものとして現在実物を確かめられるのは、一九三〇年(昭和五)、山頂の三島ヶ嶽(神仏分離以前の名は文殊ヶ岳)の南麓から見つけた、青銅製の筒に入った經典です。それには承久という年号が書かれています。これは承久の乱で知られる鎌倉時代初めの年号で、西暦でいうと一二一九―一二三二年です。紙は湿気のためにへばりついていて開けないのですが、幸運なことに、年号の「承久」だけは確かめられます。したがって、遅くとも鎌倉時代初めには、富士山頂に登って經典を埋納する修行者たちのいたことがわかってきたのです。

南北朝時代の一三〇〇年代中ごろ、相模国(現在の神奈川県)、上総国(現在の千葉県)など関東および尾張国(現在の愛知県)の人々が願主となつて、大日如来像や地藏像などを鑄出した懸仏(かけぼたけ)を山頂や五合目などに奉納しており、富士信仰が東海地方から関東地方に広がったことを示しています。

富士山の神は、もともとは火の神の浅間大神(あさまのおおかみ)でした。のち浅間大神と浅間大菩薩(せんげんだいぼさつ)は同一とみなされるようになり、さらに江戸時代には、富士山の神を木花開耶姫(このはなさくやひめ)と考えられるよう

になりました。それとともにいろいろな木花開耶姫が描かれ、像も作られますが、北齋も『富嶽百景』の中に木花開耶姫を描いています。

6 修行の場、富士山

富士山・白山とともに日本の三霊山とされる立山にも、多くの修験者がいました。そして、彼らの修行場である立山連峰の劔岳頂上周辺は、明治中ごろまで正確な地図ができていませんでした。そこで陸地測量部が登山隊を結成し、山頂部分の地図の作成に挑みました。折しもヨーロッパから始まったアルピニズムが日本にももたらされ、日本山岳会が初めて作られたのもこの頃のことです。日本山岳会も、日本最後の未踏の霊峰といわれる劔岳を、陸地測量部とほぼ同じ時期に目指しました。そのことを知った陸地測量部は、国家の威信にかけて一番乗りに挑むわけです。

しかし、過酷な気象条件のため、難航を極めます。苦勞しながらようやく山頂にたどり着いたところ、山頂付近から、既に一〇〇〇年も前に登った立山修験者の残した銅製の錫杖の頭などが見つかりました。現在のような優れた登山装具のない時代、山を修行の場とした修験者の精神と行動に

は驚嘆します。このことは新田次郎の小説『劔岳(点の記)』に詳しく描かれています。

このように、山伏や修験者と呼ばれる人々は、厳しい山であるからこそ、山を駆け、山に籠る修行の場にするのです。富士山にも劔岳と同じように信仰として登り始める人々が出てきたのです。

7 信仰の拠点、浅間社

富士信仰の拠点となった富士浅間社(現在は富士宮市にある富士山本宮浅間大社)は、古代にあつては靈験著しいとされる名神大社で、中世以降は駿河国一宮として崇敬を集めました(図4)。

一宮は各国の鎮守神で、神社の維持や運営のための財政支援が行われ、伊勢神宮や石清水八幡宮など京都と周辺の二十二社とともに、一二世紀末から一二世紀初頭にかけて、制度として成立しました。一二一九年(承久元)正月、駿河守に任じられた北条泰時は、それからおよそふた月のち、駿河国の一宮富士浅間社に参詣して和歌を奉納しています。

本宮浅間大社を考える場合、それ以前の古い形態を示すものとして、山宮浅間社があります。山宮浅間社には大きな岩



図4 富士山と富士山本宮浅間大社／富士山本宮浅間大社所蔵

と木立ちと祭祀さいしに用いる敷石があるぐらいで、常設の建物は
ありません。もともと、神南備かみなびと呼ばれる神の住まう場は、
自然崇拜にもとづく森や岩などのある地であり、建物はな
かったのです。その本源的な形態は、沖繩にある御嶽うたきによつて
知ることが出来ます。二〇〇〇年に世界文化遺産に登録され
た斎場御嶽せいかあ（沖繩県南城市）は、琉球の創世神が降臨した地
と考えられており、最高の聖地とされています。森の中に岩と
祭祀の場があるぐらいで、建物などないのです。

富士山はもともと火を噴く荒ぶる神ですから、災厄をのが
れるために鎮めなければなりません。山宮浅間社の石段を上
がって、祭祀の場に出た途端、里よりもはるかに壮大に見え
る富士山に圧倒されます（図5）。おそらくここから神体とし
ての富士山を遥拝したのでしょう。私たちは、華麗な装飾の
施された建造物のある社むらを信仰の場と考えがちですが、それ
はのちの時代のことです。もともとの信仰の場はきわめて素
朴で、自然の靈力を感じられるところでした。こういう場所こ
そ、富士山を神として祭ったもとの姿だったのでしょうか。

徳川家康の命をうけて造営された、浅間造せんげんぞうと呼ばれる特殊
な二階建ての壮麗な建物などが立ち並ぶ本宮浅間大社は、山
宮浅間社の里宮としての役割をもっています。富士山八合目
以上（国有地を除く）は、長い論争を経て、本宮浅間大社の保

有が認められています。

そして登山道表口に位置した村山には、村山三坊といわれ



図5 山宮浅間神社より望む富士山(静岡県富士宮市)

る大鏡坊・池西坊・辻之坊があり、峰入修行の修験者の拠点として繁栄しました(図6)。富士山に登ったと伝えられる末代の創建になるという興法寺は、先に述べた『富士参詣曼茶羅図』のほぼ中央部分に描かれています。そこには参詣者の前で舞う巫女みこの姿も見られます。行者たちは興法寺に宿泊したのち、山頂を目指しました。

村山三坊は、神仏分離から廃仏毀釈に至る過程で衰退の道をたどりました。中世から近世にかけての富士信仰の実態を知るため、関係資料の収集と分析による村山修験の解明は、早急に取り組まれるべき重要課題です。

一五〇〇年(明応九)には関東の戦乱を避けて、須走口(現在の小山町)も利用されるようになりました。そして東海道筋からの参詣者によって利用された大宮口(現在の富士宮市)には、参詣者の祈禱や宿泊などを世話する御師おしが増加しました。日本全国の霊山には御師が必ずいました。ただし伊勢神宮だけは別格なので、同じ字を書いて「おんし」と読みます。大宮口の御師は、一六世紀半ばの享祿・天文(一五二八〜五五年)頃には三〇余りを数えたといえます。

『富士参詣曼茶羅図』には、富士浅間社境内の湧玉池わきたまでみそぎをし、村山口から山頂を目指す富士登拝の様子が描かれており、何よりも富士山は仏と神の共存する世界と考えられて



図6 村山口(静岡県富士宮市)

いたことがわかります。湧玉池について、岡本かの子は福慈の女神を描いた小説『富士』の最終章で、湧玉池を生きている富士山の鼓動を示すものとして次のように表現しています。

朝日がひむがしの海より出で、山の小額を薔薇色に染めかけるとき、この水の底から湧く泡の玉は特に数が多い。夜中に籠れる歎気を吐くのであらうか、夜中に凝る乳を粒立たすのであらうか、とにかく、この湧玉をみて、そして峯を仰ぐとき、確に山の眼覚めを思はせる。

現在、富士山の山開きは七月ですが、明治以前は旧暦六月一日でした。一五世紀中ごろ、関東の水陸交通の要衝として発展した江戸品川湊の豪商であった鈴木道胤は、六月一日の山開きの日に代官六人を参詣させています。一五一八年(永正一五)六月一日、嵐により参詣者一三人が亡くなったのも、山開きの日のことでした。

山梨県富士吉田市には北口本宮富士浅間神社が鎮座しています(図7)。江戸時代、富士講の隆盛とともに、登拝者の多くは吉田口に集まり、社殿に参拝したのち、「富士山」の額が掲げられた鳥居を通過して、山頂を目指しました。現在でも、七く八月に山梨側と静岡側からの登山者約三〇万人のうち、半分以上は吉田口からです。

講義の開始前に、聴講者の所蔵される掛軸を拝見する機会



図7 北口本宮富士浅間神社(山梨県富士吉田市)

がありました。それには吉田口からの各所にある建物が描かれています。この図様はこれまで知られているものですが、着色などほかの絵とは少し違うようです。画面の一角に「河口の御師」と書いてありますので、河口浅間神社によって発行され、吉田口から登るときに使われたものでしょう。作成年が書かれていないので、調べてみないと詳しいことはわかりませんが、江戸時代終わり頃のものだろうと思います。

8 ナショナル・シンボルとしての富士山

江戸時代に入って、江戸が政治や文化の中心となり、参勤交代や商人たちの旅などによって東海道や中山道の往来が盛んになるにつれて、富士山は日本の象徴、ナショナル・シンボルと考えられるようになりました。

ナショナル・シンボルとしての富士山という視点を打ち出したのは、アメリカの日本および東アジア近世・近代史研究者であるロナルド・トビさんでした(『全集日本の歴史9 「鎖国」という外交』小学館、二〇〇八年)。ロナルド・トビさんは、富士山が国土全体を象徴するナショナル・シンボルになった過程について見直し、富士山を国の全域や政体などの象徴とみるイデオロギーが成立したのは、近世以降の現象と指摘しています。



図8 人穴富士講遺跡(静岡県富士宮市)

また、名所記や紀行文などの文学作品や浮世絵などのさまざまなメディアによって、富士山に関する情報は列島中に伝えられ、文字どおり、富士山は日本人にとつてのナショナル・シンボルになっていったのです。

さらに江戸を中心とする関東の人々に富士信仰を広めたのが長谷川角行です。角行は、富士の人穴ひとあなにこもる修行を続けました。真つ暗な人穴の奥には、小さな祠ほくらが祭られています。

一六四六年(正保三)に亡くなった角行から六代目の行者の食じき行ぎょう身み禄りくは、一七三三年(享保一八)に富士山七合目の烏帽子岩えぼしいわで断食だんじきのすえ亡くなりました。身禄みりくや弟子たちの布教活動により、万物創造の神である仙元せんげん(浅間)大菩薩を信仰し、日々の暮らしと倫理の大切さを説く庶民信仰の組織として関東地方に広がったのが富士講です。数は少なくなっていますが、関東地方などには依然として残っていて、現在でも七月の山開きには、白装束の富士講の人たちが「六根清浄ろくこんしょうじょう」と唱えながら入山します。

東京都内には今もいくつか富士塚が残されています。富士塚は、富士山に登った富士講の人々により、富士山に模して造営されたものです。富士講の信者たちが角行ゆかりの人穴に参詣した人穴富士講遺跡には、現在二三〇余の石塔(墓)が確認されています(図8)。

9 災害と富士山

一七〇七年(宝永四)十一月二三日(新暦で十二月一日)、およそ六三〇年ぶりに富士山が大爆発しました。これが過去二〇〇〇年間に七五回ほど記録されている富士山噴火のなかで、八六四年の貞観噴火とともに規模の大きく、甚大な被害を与えた宝永噴火です。その四九日前には、東海道・南海道を中心に、マグニチュード八・六と推定される大地震が起こっています。近年の火山学や地震学で、宝永噴火はこの大地震を導因として起こったと指摘されています。地震による活動が富士山に影響を与え、山麓での鳴動などの前兆現象を経て、四九日後に爆発したのが宝永噴火なのです。

この宝永噴火は御厨地方(現在の御殿場市や小山町)など周辺地域に大きな被害をもたらしました。復興のため、半世紀以上にわたり苦闘を続けた人々の姿は、人間と自然、災害と社会との関わりを考えるさいの学ぶべき材料になっています。このときに、富士山東南麓と丹沢山地から流れて、足柄平野を南に下り、小田原で相模湾へ注ぐ酒匂川も火山灰で埋まりました。あまりにも大規模な被害のため、小田原藩や幕府による救済は進みませんでした。私たちは歴史の中の災害の記憶を掘り起こして大事に保存し、被害の実態や、悲しみと

喪失感を抱きながら復興への歩みを続けた人々の活動について、過去の経験から学ぶべきだろうと思います。

災害が起こるたびに、当たり前前の日常の脆さと大切さを改めて感じます。物理学者であり、夏目漱石とも親交のあった寺田寅彦が、

文明が進むほど天災による損害の程度も累進する傾向があるという事実を十分に自覚して、そして平生からそれに対する防御策を講じなければならぬはずであるのに、それらがいつこうにできていないのはどういふわけであるか。(「天災と国防」)

と、鋭く問いかけたのは、八〇年も前の一九三四年のことでした。私たちは以前からこのことを県や市などの行政担当者らに訴えかけてきましたが、あまり聞く耳を持ってくれませんでした。しかし、二〇一一年三月二一日の東日本大震災以来、地域の災害に関する記録を集め、災害に強いまちづくりにかしたいという方向に変わってきています。単に古いことを振り返るだけではなく、被災と救援にあたって何が問題だったのか、繰り返しはならない過ちは何なのか、などの問題を省みて、それらの解決策を探り、実行に移す取り組みが大切だと思えます。そしてこれからは、噴火や地震・津波など自然災害史・環境史をも視野に収める歴史学の必要性が高まっている

といえるでしょう。

10 アルピニズムと富士山

幕末の一八六〇年(万延元)には、初代イギリス駐日公使オールコックが外国人として初めて富士山に登りました。彼は何度も幕府に富士登山を申請しますが、そのたびに、幕府はさまざまな理由をつけて認めませんでした。オールコックの意図は信仰によるものでなく、困難を伴う山岳の征服を目指すアルピニズムがイギリスを中心に発達したことに関わります。世界最高峰のエベレスト(チベット語でチョモランマ、ネパール語でサガルマータ)に登ったのも、イギリス登山隊のエドモンド・ヒラリー(ニュージーランド出身)でした。

何度も申請するので、仕方なく幕府は役人の番人つきで認めました。オールコックはその記録を『大君の都』に残しており、途中で測量をしながら、富士山頂周辺でコーヒールを飲んだことも書き留めています。測量の結果、最高峰の高さは一万四一七七フィート(約四三二二メートル)と記されていますから、精度が高くなかったようで、現在よりも五五〇メートルほど高い数字になっています。ようやく念願かなって、富士山のふもとまで下つてくると台風に襲われていて、それは「神聖

な領域を汚した外国人にたいする神々の怒りのしるし」という地元の人たちの噂を耳にしています。つまり、当時、一般の民衆にまで、富士山が聖なる力を持った霊山と認識されていたことを示しています。

オールコックが外国人として最初の富士登山をはたした一八六〇年から三〇年後、初来日したラフカディオ・ハーン(小泉八雲)も、富士山に魅せられたひとりでした。ハーンは横浜港に向かう船上から明け方の刻々と色合いを変える富士山を眺めて、「その息を呑むばかりの美しさに恍惚となつて見とれている」(「日本への冬の旅」と、霊的な清らかさをもつ美しさを表現しています)。

江戸時代までは、女性が登つてよいのは二合目まででした。一八三二年(天保三)には、たつ(高山辰)が女性で最初の登頂者になりましたが、太政官布達により女性の富士登山が解禁されたのは一八七二年(明治五)、今からわずか一四〇年ほど前のことです。

富士山頂の峰々を巡ることを、お鉢巡りといわれています。お鉢の名は全国の火山にもみられ、火口の形からつけられたものです。富士山の場合、頂上には八つの峰があると考えられています。これは蓮華の花弁が八つであることと関わります。釈迦がその上に座つて修行を積んだことから、蓮の花は神聖なも

のと考えられています。したがって、仏教世界では「八」は聖なる数字とされ、八正道・八功德など八のつく仏教語はたくさんあります。また日本固有の信仰のなかでも、八百万やおよろずの神や八幡神社のように、「八」は聖なる数字として考えられており、仏教と固有信仰とが結びついたのでしょう。

ところが、明治初年の神仏分離から廃仏毀釈に至る過程で、富士山からは一切の仏教の要素が排除されています。長い間、神と仏のいます霊山であった富士山から、神と仏の世界をわけることが強行され、山頂の峰々の名前も変えられました。阿弥陀岳は伊豆岳に、文殊ヶ岳はのちに三島神社が祭られていたことから三島ヶ岳に、釈迦ヶ岳は白山信仰の神社があったことにより白山岳に変更されました。薬師岳にいたつては、「薬師」を「クスシ」と読んで、漢字の「久須志」を当てています。このように、富士山は長い間、神と仏が一緒に住む宗教世界を形作っていましたが、神仏分離とそれに続いておこった廃仏毀釈は長い歴史の積み重ねを分断して、神の世界だけにしてしまったのです。

11 世界一の山

富士山は、教科書や文部省唱歌、さらに切手・映像・貨幣・写真・文芸作品・工芸品など、広範なメディアや意匠に取り上げられるにつれて、「日本一の山」「世界に冠たる山」としていつそう広く国民に受け入れられていきました。

前にも述べたとおり、正岡子規は、多数の俳句や和歌のほか、「富士見西行図」も描いたように、富士山に深い関心をよせていました。一八九〇年(明治二三)には、「富士の山」として三首を詠んでいます。次の歌はそのひとつです。

万国の博覧会にもち出せば 一等賞を取らん不尽山

この年二四歳の子規は、第一高等中学校を卒業し、帝国大学文科大学に入学しています。富士山は世界で一番の山、という当時の日本人に広く受け入れられつつあった認識を、子規は率直に表現したといつてよいでしょう。子規は、一八九〇年頃、江戸時代以前の文学作品を中心とする「富士のよせ書」の編集に本格的に取り組んでいます。また、子規はこの年の四月に始まった第三回内国勸業博覧会を見ていることも、「万国の博覧会」の歌の着想に結びついていると考えられます。

また、地理学者・志賀重昂しげたかの『日本風景論』は、一八九四年の刊行後、国粹保存主義のもとに風景ナシヨナリズムを宣揚し

て版を重ね、日本山岳文学史上の名作とされているものです。この著書のなかで、志賀は富士山を「『名山』中の最『名山』」とし、「富士実は全世界の『名山』の標準」とも表現しています。その美をたたえる日本人の作品として、ただ一つ挙げていますが、駿河国藤枝宿（現在の藤枝市内）の文人、石野雲嶺の詩文です（図9）。その詩文を書き下しにします。

鐘め得たり秀霊の気 築き成す東海の湾に 天の工此に
尽き 復た名山を出さず

志賀は、天の造ったもので富士山に及ぶものはない、という雲嶺の詩の一節に深く感じ入って、「日本人の富士山を誇揚する詩文として注目したのだろうと思います。それまでほとんど注目されることのなかった一地方文人の石野雲嶺は、『日



図9 石野雲嶺の肖像／石野忠明氏所蔵 図説藤枝市史より採録

本風景論」に引用されたことにより、名前を知られるようになりました。

一九一一年（明治四四年）、「尋常小学唱歌」に「ふじの山」の歌が登場しました。以後、小学校教育のなかで、世界に冠たる日本の山として富士山が取り上げられていくようになりました。富士山周辺の静岡県内の小学校児童の多くは、この歌を知っているといえます。静岡市内では繁華街の横断歩道で青信号になると、「ふじの山」のメロディーが流れます。

さらに、切手にも富士山が登場します。とりわけ大きな影響を与えたのは、一九三五年（昭和一〇）の富士山をデザインした年賀切手です。これによっても、富士山はいつそう著名な存在になったのです。

12 気象観測の拠点

明治時代中ごろの日本人に大きな勇氣と感動を与えたのが、野中至・千代子夫妻です（図10）。野中夫妻による富士山頂気象観測所の設置を目指した、前人未到の厳冬期山頂滞在の報道が国民に共感と関心と呼び起したのは、一八九五年（明治二八）のことでした。

野中至は気象研究者です。日本の気象を明らかにするため

には、どうしても富士山頂に観測所が必要である、との信念のもとに、彼はいくども富士山に登り、観測所の設置場所を調査しました。そして、詳細は真冬に登つてみなければわからないと思いいたり、一八九五年一〇〜一二月の真冬の時期、富士山頂の岩室の中に入ります。御殿場周辺の人たちの多大な協力を得て、富士山頂によりやく小さな数畳敷きの小屋が造られました。そこで至は単身、気象観測を開始したのです。このとき満二八歳でした。

それから一〇日ほどたった二〇月一二日、観測所の木のドアをたたたく音がします。開いてみると、なんと妻の千代子でし



図10 野中至と千代子／『富士案内 芙蓉日記』(平凡社ライブラリー)より採録

た。千代子は至と同じ福岡の生まれで、至より四歳年若でした。至は富士山頂に観測所を作るための予備調査として、翌年の春まで観測するつもりだったようです。千代子には、実家の福岡に帰つて両親と二歳の娘をよく育ててくれと、おそらく決死の別れをしたのでしよう。ところが、千代子は居ても立つても居られません。そこで実家に娘を預けて、富士山に登るのです。野中至の記録『富士観象台建設事業に関する略歴』には、「同月(一〇月)十二日妻期せずして登山し来る」とあります。わずかこれだけです。一体、千代子がどのようにして来たのか、どういう思いで夫の至と一〇、一一、十二月と真冬の富士山頂で観測したのか、広く知られていませんでした。

近年、野中千代子の記録『芙蓉日記』が、大森久雄氏の編集によつて、至の『富士案内』などとあわせて平凡社ライブラリーに収められ、読みやすくなりました。それによると、千代子を見た至は驚き、しばしの沈黙ののち、千代子からふるさとの人々の健勝を聞いたのち、夜が明けたら、すぐ下山せよ、と言いつつたというのです。それに対して千代子は、

妾わらわもおもふふしの有れば此度このたびは仮令たとへいか程の御おんしかりを受うるとも一命いちめいにかけても事は候さうはじといなみ参らせ……

と書いています。つまり、命かけてあなたの観測活動を支えたい、との決死の思いでやってきた、と言っています。劇的な再

会に際して、夫の至の言葉はまことにそつけないのですが、おそらくこれは妻の身の危険や、実家に残してきた娘のことなど、複雑な気持ちがないまぜになった表現なのでしょう。妻が何の前触れもなく姿を見せたのは、思いがけなかったことでしょうけれど、うれしかったに違いありません。彼はそれを素直に表現できず、妻に明朝帰りなさい、と言ったのでしょう。しかし、千代子はそれを拒んで帰りませんでした。

その後しばらく、千代子も至とともに富士山で観測を続けます。ところが、二人とも徐々に体調を崩し、全身にむくみが出てきます。たいへん重い症状になり、動けなくなつた状態で、さらに食欲がなくなり、朝と夕の二食もおかゆしか受けつけません。食料は十分持つて登つたのですが、干し肉などは食べる気も起こらず、ますます衰弱していきます。そこでやむを得ず、至は計画を断念し、山を下りようと千代子に言ったところ、千代子は賛成しません。結局、救援を求めて二人は一二月二日に下山しました。実際には一〇月から一二月にかけての二か月あまり、富士山頂に二人でとどまつて、観測を続けたこととなります。これが、野中至・千代子夫妻の富士山頂の観測所を造るに当たつての記録です。こういう心骨強き志を持った人たちが明治時代にいたことを、私たちは心にとめておきたいと思ひます。

この成り行きはしばしば新聞で報道されたこともあり、日本中で話題になつたといひます。そして、野中夫妻の苦闘と関係者の支援とを尊い礎いしづえとして一九六四年に建設されたのが、富士山リーダーです。現在は衛星でデータが送られるようになったため、一九九九年にリーダーの運用は終了しました。けれども、野中夫妻の悲願があつた富士山頂観測所に込められていたことを、私たちは大切に語り伝えたいものです。年表に書いてしまえば、「一九六四年、富士山頂にリーダー設置」と、わずかそれだけのことですが、その一言の裏には生命を賭して敵しい自然に挑んだ人たちの強い志と多くの労苦があることを、皆さん方にもぜひ知っていただきたいと思ひます。

歴史好きの学生はあまり多くないようです。その理由は、教科書に年号や人名・事件がたくさん現れて、干からびた暗記科目という印象をもつからでしょう。しかしそれは覚える歴史であつて、これからはぜひ考える歴史学を身につけてほしいと思ひます。教科書や年表のわずか一行の裏にある人間の活動、思いもかけないことがらや人間のつながりを見出し、それらの影響に考えを巡らせてほしいのです。先人たちの生き方や智慧を材料として、自分はそれに対してどう考え、行動するか、自分自身の生き方を問ひかけることにも結びつけられるのではないのでしょうか。

13 近代の画家あこがれの的

近代の画家にも、富士山にあこがれ続けた人がたくさんいます。その筆頭は、横山大観でしょう。大観は、

富士の美しさは季節も時間もえらばぬ。春夏秋冬、朝昼晩、富士はその時々で姿を変えるが、しかし、いつ、いかなる時でも美しい。いわば無窮の姿だからだ。私の芸術もその無窮を追う。

と述懐し、自己を磨き上げる表現の対象として、富士山の美しさを描き続けました。大観は生涯のうちに一〇〇〇点を超える富士山の作品を残しており、富士山をもっとも多く描いた画家、と言われています。大観は、富士山の美しさに魅了されたばかりでなく、描くことによって自分の芸術を錬磨していくところに、芸的の心性があつたのです。一方で、そのなかには当時の多くの画家と同じく、戦争遂行という国策の宣伝教化に使われた富士山と桜を題材とする絵が多いことにも目を向けなければなりません。

先にあげた大観の文章には、富士山の美を追求してやまないく多くの画家たちに共通するものが見られると思います。おそらく彼ら・彼女らは、富士山に向き合いながら絶えず自分を見つめ、自分をどうやって鍛え上げればいいのか、磨き上げればい

か、との思いで富士山を描き続けているのではないのでしょうか。

一〇〇歳を超えてなお現役として活躍し、二〇〇八年に亡くなった日本画家の片岡球子もその一人です。片岡球子は連作の「富士に献花」で、富士山に色鮮やかな花々を配する独創的な意匠により、富士山に感謝する絵を描き続けて捧げたのです。

優れた写真もまた、富士山の魅力を多くの人に伝えました。写真家の岡田紅陽は早稲田大学在学中、富士山に魅せられ、生涯に四〇万点近くの富士山の写真を撮影したといえます。一日のうちで、また季節ごとに姿を変える富士山を追いつづけた岡田紅陽の気魄あふれる作品は、山梨県忍野村の岡田紅陽写真美術館に所蔵・展示されています。

最初に申し上げたとおり、日本のパスポートの一枚目には、富士山と桜の花が透かしとして印刷されています。このことが示すように、富士山は日本国民であることの表徴としての意味を担っています。現在、富士登山口は、静岡県側の富士宮口・須走口・御殿場口と、山梨県側の吉田口の四つです。これらの登山道から登頂する人々は、夏場のわずか二か月間だけで約三〇万人の多きに及びます。富士山が折々に見せる、光と霧りと色彩の綾なす荘厳で神秘に満ちた自然現象は、生きていく富士山を実感させ、これからも人々をひきつけてやまないことでしょう。

14 世界文化遺産の登録

富士山は、文化創造の汲めども尽きぬ泉としての役割を果たしてきました。山部赤人が「語り告げ言い継ぎ行かむ」（伊藤博『萬葉集釋注』集英社文庫）と、富士の高嶺の崇高さを高らかに歌い上げたのは、一三〇〇年ほど前のことです。

そして昨年（二〇一三年）、富士山は世界文化遺産に登録されました。世界遺産の推薦に当たっては、世界遺産条約締結の文化財に関する法規によって指定され、保存・管理されていることが前提条件です。日本の場合には、文化財保護法がそれにあたります。しかし、富士山は一九五二年、特別名勝に指定されたものの、史跡指定はうけていませんでした。そこで急ぎよ、文化庁の指示もあり、静岡県・山梨県の教育委員会や関係部局が、史跡指定のための保存管理計画書を策定しました。私は静岡県の委員長を務め、報告書を刊行しました（『史跡「富士山」保存管理計画（静岡県版）』静岡県、二〇一二年）。

専門機関の国際記念物遺跡会議（ICOMOS/International Council on Monuments and Sites）は二〇一二年の現地調査にもとづき、「富士山のイメージは、明らかに日本文化の表現として西洋芸術にもたらした衝撃ゆえに、顕著な普遍的意義

を持つ」と評価し、富士山を世界遺産一覧表に記載することを勧告しました。しかし、三保松原は富士山から四五キロメートル離れ、巡礼路の一部でもない、として除かれました。事前の話では、登録は厳しいと聞いていて心配しましたが、関係者の努力により、二〇一三年六月の第三七回世界遺産委員会では、委員国の支持をえて、三保松原も含む「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」として、世界遺産一覧表に記載することが決議されました。

それは二五の構成資産からなります（口絵12）。中心は富士山域です。静岡県側でいうと、富士山本宮浅間大社、山宮浅間神社、村山浅間神社、白糸ノ滝、人穴富士講遺跡、須山浅間神社、須走浅間神社、そして雪舟の「富士三保清見寺図」などにも描かれた三保松原も含まれます。山梨県側では、北口本宮富士浅間神社のほか、御師住宅二か所が注目されます。

15 おわりに―これからの課題

きょう私は、富士山の信仰と芸術の二つをキーワードにしなから、富士山の宗教文化史をお話ししました。

富士山は、神の住まう神南備として、ほかの霊山と共通する要素も多いのですが、大きく異なるのは、火を噴き、煙を

たなびかせて、生きている証しを実感させ、しかも連なる峰々のひとつではなく、独立の孤峰であることから、美しさと荒々しさを刻々変化させ、遠く離れた平地からも望み見ることができるといふきわだった自然条件にあります。

富士山はもともと、登ってはならない霊峰でしたが、山を修行実践の場とする修験者が登拝しようとする一方で、噴火の火に重ねて、自分の切々たる恋心が詠まれるようになり、さらにはあこがれ続けた富士山への感慨が歌や文に表現されました。また、玲瓏とそびえ立つ山容に、多くの画家や写真家が今も魅せられています。

日本人にとって富士山がナショナル・シンボルとしての大きな意味を果たすようになったのは、ロナルド・トビさんが言うように江戸時代以後でしょう。しかし、それ以前にも、富士山は畏怖すべき信仰の聖地であり、文人や歌人・画家などにとって、芸術の対象であり続けました。したがって、富士山は信仰や修行の場であるとともに、芸術家にとつて、歌に詠み、文に表し、また描くことは自分を磨き上げる題材として、みずからの生き方と向かい合うことであり、それぞれの手法と技術を通じて、富士山を息づかせることにもつながったのです。

世界文化遺産登録にあたり、文化的景観として管理するための管理システムの実施、山麓の巡礼路の特定、富士山がも

つ普遍的価値の周知など、いくつかのむずかしい課題も勧告されています。二〇一六年二月一日までに、これらの課題解決に正しく向き合った保全状況報告書を世界遺産センターへ提出しなければ、最悪の場合、世界遺産委員会がこれを認めず、登録抹消の可能性もあります。現実に世界文化遺産に登録されながら、保存措置などが十分に講じられなかった、あるいは世界遺産委員会が勧告したにもかかわらず、それをきちんと報告しなかったことなどによって抹消されている事例もあります。

私は富士山や三保松原の保存管理計画の策定に関わりましたので、世界文化遺産への登録は喜ばしく思っています。しかし同時に、登山者や観光客の増加に伴う対策、ともすると観光最優先に傾きがちな開発行為に対する適切な規制など、むずかしい宿題を課されていることにも危機感もついています。しばしばみられる話題一見の足早の旅行から、これからは文化としての富士山を楽しむ、成熟した知的な旅、カルチャーツーリズムへという、新しい観光の道を模索することも大切でしょう。

静岡県は富士山世界遺産センター(仮称)を富士宮市の本宮浅間大社近くに設置する構想を固め、準備に着手しました。二〇一六年度の運用開始を目指しています。このセンターに対

して要望したいことは、何よりも「信仰の対象と芸術の源泉」を究明するため、山梨県とも協力して、富士山に関する古文書・記録・文学・美術・工芸・伝承などあらゆる資料を収集し公開することです。そのことにより、長い時間の経過のなかで選ばれた文化体系としての富士山に、学問として正面から向き合うことができると思います。さらに日本のほかの霊山にとどまらず、世界のそれらとの比較にまでおし進めることにより、富士山を広く深く読み解き、その価値を明らかにして長く伝えるための、ゆるぎない基礎を築く役割も望まれます。

私たちは富士山を人類全体の歴史文化遺産として継承するために、自然と文化の環境の保全と、周辺の景観を含めた整備に万全の対策を講じることによって、新たな生命を吹き込む時期を迎えています。世界文化遺産への登録は、これからはるかに続く道のりの一里塚です。

「講師紹介」

湯之上隆（静岡大学人文社会科学部教授）

一九四九年鹿児島県鹿児島市生まれ。九州大学大学院文学研究科史学専攻博士課程中途退学。（主な著書）『三つの東海道』、『日本中世の政治権力と仏教』、『くすりの小箱』（共編）。